

佐賀新聞 2009(平成21)年12月12日(土) 県内文化欄 文化時評

文化時評 2009

美術

野中 耕介

(美術) 作品が作品として成立するために必要な要素はさまざまあるが、例えば一枚の絵を見る時、私たちは大方の場合まず「そこに何が描かれているか」を真っ先に気にする。そして、わたしたちはそこから、作家の思想や作風の新旧等を感じ、作品の質的な部分についての価値判断をしているのだが、そうした作風、内容を支えるものに、ものとしての「質感」も含まれるはずである。

質感とは、材質(画材)そのもの

のが持つ物質としての特徴のこと、それをどこまで洗練させているか、また、材質に潜在する多彩な表情をどれだけ引き出しているかということも、内容と同時に関係している。洗練からはいまだ遠いものも多くはあるが、手法が意外性に富み、見る者を飽きさせない。やはり若手ならではの生きのよさがある。

同時に、作品が作品として成立するための重要な要素であり、またそれが時として、主張その維そのものに質感させようとする。印象に残った作品をあげる、と、絵の具を盛り上げ、豊の織

「質感」を求める日

たかのよ
うな前田
祐希のト
自身に比して「大きすぎ

ものにするなりである。佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程による「第51回総合展」(11月、県立美術館)は、学生らしく毎年多様なスタイルの作品が出品されるのだが、それだけに、質感の点から見てもさまざまな試行錯誤が見られて面白

写により描かれた佐伯の蝶は、

ストリートな手法ながら、描画材料の質感にたいする興味、その視線が明確にあらわれており、さらに、作品の洗練された手工芸品のようなたたずまいは、とかく観念的で大画面の制作に傾きがちな、多くの若手の作品とは異質の魅力を放つ。以前にもお話ししたことだが、若手、特に画学生の作品は自身の力量に比して「大きすぎる」と感じるものが多い。公募展出品の規定上やむを得ないことではあるが、作品の大きさを他者が決めた「ルール」からではなく、自身の内側の感性の側から考えてみる、ということをやってみてはいかがだろうか。

(県立美術館学芸員)